

だけのご幼稚園とラジオのおっちゃん(11)

庄籠しょうごもり 道子

横取り事件の巻

この前入園したと思ったのに、もう三月。あと二週間で卒園だ。ぼくたちは、毎日、せっせと遊んでいる。

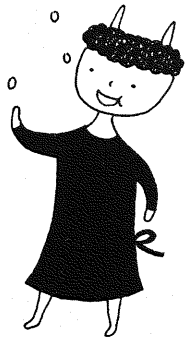
じゅんが先生に言いに行った。

「先生、もちくんが、ぼくのつみ木、取った」

「ぼくのつみ木って、あれは幼稚園のつみ木やで」
籠先生に言われてじゅんが半べその顔で先生をにらみつけた。

「ああ、ごめん、ごめん。そういう話じゃないんやね。どうしたって？」

と、籠先生はじゅんといっしょにつみ木置き場に行った。



「もちくん、じゅんくんのつみ木、取ったん？」
もちは黙ってかぶりをふった。せつせとつみ木を遊戯室のまん中に運んでいる。

「取ってないって言ってるねえ」

「取った！」

と、じゅん。

「えっと、じゅんくんは、どこでどないしよったん？」
籠先生はじゅんに聞いた。

「あんな、ぼくがな、ここだな、つみ木をこうな

……」

じゅんは、つみ木置き場に行き、長方形のつみ木をかかえて、遊戯室のまん中にむかって歩きはじめた。

「ああ、つみ木を運んでたんやね」

「うん。そしたらな、もちくんがな、取ったんや」
なるほど。じゅんが使おうと思って運んでいたつみ木をもちが横取りしたわけだ。もちは虫なら虫しか見えない子だから、つみ木しか見えてなかったんだらう。つみ木置き場にあるつみ木も、誰かが持つてるつみ木も、もちにとつて同じなわけだ。

もちは横取りしたつもりはなかったから、かぶりをふったんだ。なるほどね。籠先生は妙に納得した。しかし、納得している場合じゃない。じゅんにしてはたまらない。そりやそうだ。せつかく運んでるのに、横取りされちゃかなわない。えっと、まず

は確認だ。

「つまり、じゅんくんが使おうと思って、こうやって運んでいたつみ木を、ももちくんが、横から取ったわけね？」

籠先生はじゅんに聞いた。じゅんは

「ううん」

と、首を横にふった。えっ？ 違うの？ 横取りされたんじゃないの？ 籠先生はびっくりした。じゅんは続けた。

「違う。前から取ったの」

「……あつそう。そうか。横から取ったんじゃないやなくて、前から取ったわけね。そうか、そうか。なるほどねー」

籠先生は、にやにやしながらうなずいている。

「ももちくん」

籠先生はももちを手招きして、つみ木置き場に置いてあるつみ木と、誰かが持っているつみ木の違い

について、ももちにお説教をはじめた。だけど、にやにやするばかりで、まるで迫力がない。籠先生らしくない。変なの。

お弁当を食べる用意をしている時に、まきが籠先生に言いに行った。

「先生、目が痛い」

籠先生は、まきの目を見て言った。

「ごみでも入ったかな。ちよつと赤いかねえ、お水で洗ってみようか」

水道の所に行った。

「おててを丸くお皿みたいにして、お水入れて、目、パチパチやんの。できる？」

まきはやってみた。

「どう？ まぎちゃん。よーなった？」

「ん、よーなったかなあ。よーわからん」

「そうか、おべんとうは、食べれそう？」

「うん」

「じゃ、食べよ。また、痛かったら言うてね」

まきは時々首を振りながらお弁当を食べた。お弁当を食べてしばらくすると、また、まきは籠先生のところに行つた。

「やっぱり痛い」

籠先生は救急箱から目薬を出して、まきの目にさした。

「どない？」

「うーん……いいみたいかなあ」

どうもいまいちすつきりしないらしい。まきは首をかしげながら、むこうへ行つた。

しばらくして、げた箱でくつをはきかえながら、

まきがまた籠先生に言った。

「やっぱり、まだ痛い」

籠先生はうでを組んで考えた。

「うーん、おかしいねえ。病院に行つたほうがいい

いかもね。幼稚園から帰ったら、お母さんに話してみて……で、まきちゃん、どんなふう痛いのか？」

「どんなふうって？」

「えっと、チクチクする？」

まきは首を横にふつた。

「ううん」

「じゃあ」

籠先生は考えた。目が痛いときってどんなふう痛いんだっけ。えっと、そうだ。ごろごろするときがあるよね。

「じゃあ、ごろごろするの？」

まきは、下ぐつをはき終わって立ち上がり、籠先生の顔を不思議そうにじっと見上げた。そして、首をかしげながら言った。

「……ん？……音はしないけど……」

そう言うとい輪車にむかつて歩いていった。後には、籠先生がひとり立ちすくんでいた。

自転車事故の巻

たけのこ幼稚園には、自転車が六台ある。「いらなくなつた自転車はありませんか？」

と、竹田園長先生がたのんで、たけのこ公民館便りに書いてもらつたらしい。そしたら、あれよあれよと集まつたのだそうだ。

ぼくたちは、雨さえふらなければ、自転車を乗りまわして遊ぶ。園庭と校庭はつながっているから、小学生がいない時は、たけのこ小学校の校庭も自転車で走る。広いから、とても気持ちがいい。

園庭で自転車レースをする時もある。とびばこのふみ板を二つつなげて山を作る。三角コーンを置いてくねくね道を作る。両脇に水の入ったペットボトルが並んだ狭い道。ペットボトルにぶつからないよ

うに行くのは、なかなかむずかしい。ひもがひらひらついたアーチもくぐれる。

さて、その日は、もうすぐ卒園式という日だつた。

ラジオのおっちゃんが来た。ラジオはトランポリンのすみに置いた。赤い自転車に乗っているとしなりの前に立って、何か言った。としなりは自転車を降りて、おっちゃんに替わつた。おっちゃんが、この赤い自転車が好きなことをぼくたちはみんな知っている。おっちゃんは、この赤い自転車以外の自転車には決して乗らない。

赤い自転車は、幼稚園の自転車の中では一番大き

かかったが、それでもやはり子ども用の自転車なので、おとなのおっちゃんには小さかった。だけど、おっちゃんはいつも猛スピードでこの赤い自転車をこいだ。

その日は自転車レースはしていなかった。朝、ほくたちがリレーをしたから、トラックの白線が残っていた。

おっちゃんは、その白線に沿って自転車をとばしていた。何周目だっただろうか。カーブを曲がりきれなくて、おっちゃんの自転車がこけた。

「おっちゃんの自転車がこけたー！」

りょうたが叫んだ。

おっちゃんは立ち上がった。ほつぺたから血が出ている。たくさん出ている。

竹田園長先生が、ティッシュペーパーの箱を持って走ってきた。後ろから、籠先生が救急箱を持って走ってきた。

竹田園長先生が

「おっちゃん、血が出とうよ」

と言つて、おっちゃんのほつぺたをティッシュでふこうとした。

「あああつ！」

おっちゃんは、大声を出して園長先生の手を払いのけた。

「おっちゃん、血が出とんやで。ふいて、消毒せな」

籠先生もふこうとしたが、おっちゃんは、払いのけた。

騒ぎを聞きつけて、小学校の教頭先生が走ってきた。おっちゃんは、自分の手でほつぺたをさわわり、手についた血を見て

「おっ」

と、びっくりした。

「ほら、血がようけ出とるやろ。な。ふこうや」

教頭先生がティッシュでふこうとした。

やっぱりおっちゃんは払いのけた。

「あああ！」

おっちゃんは何か言うと、歩き始めた。「わしにさわるな」つて言ったのだろうか。ほとつとほつべたから血が地面に落ちた。

おっちゃんは、トランポリンにラジオを取りにくくと、そのまますたすた帰っていった。

その日の昼頃、

「おっちゃん、だいじょうぶだったかなあ。家の人、びつくりしはったやろねえ」

先生たちがしゃべっている。たつやは窓の外を見た。

「先生、おっちゃん came たで」

みんな、あわてて見ていった。

「おっちゃん、けが、だいじょうぶ？」

おっちゃんは、片手をあげて

「おう、おはようー」

と言った。

元氣そうでよかった。

おっちゃんのけがしたほつべたには白いものはつてあつた。ガーゼだろうと思つた。しかし、よく見てびつくりした。

おっちゃんのほつべたにべたつとはつてあつたもの、それはサロンパスだつた。

わー、はがす時、痛そう。

それから、何日かして、たけのこ幼稚園では卒園式があつた。ほくたち十八人は卒園した。

卒園式の日にも、もちろんおっちゃんは幼稚園に came。卒園式を庭からちよつと見ていた。ほかほかと暖かい日だつた。

(保育研究グループ はるにれ)